

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①子どもが獲得した知識を活用できるよう、学習指導の内容や教材を学年内で共有する。また、高学年での教科担任制を継続し、他の学年でも一部教科分担任制に取り組み効果的な指導に取り組み、協力的な学習の場を積極的に取り入れ、子ども同士の関わりを増やすことで、自分の考えや友達への考えのよさに気づきながら思考力を伸ばす授業づくりをする。	週に1回のブロック学習の時間に、学習指導の内容の共有を丁寧に取り組んだ。どのような活動をするのか、何を身に付けさせるのかを学年やブロックで共有しながら取り組んだ。教科担任制については、高学年で実施し、担当の教科についての教材研究の時間が確保でき、より深い学びへとつながった。	B
豊かな心	①YPアセスメントと横浜プログラムを活用し、一人ひとりの子どもに寄り添った指導・支援を継続し、互いに認め合える温かい学級風土づくりを進める。②道徳の授業において、子どもが主体的に考え、道徳的価値をとらえることができる授業を目指す。③自らあいさつできる子どもの姿を目指し、あいさつ運動の取組を継続する。	①年2回、YPアセスメントを実施し、学級風土を見つめたり個人カルテをもとに支援検討会を行い、指導や支援の改善を図った。クラスの実態に合った横浜プログラムを実施することで、仲間づくりを進めた。②子どもが発言しやすい道徳の授業を目指し、手だての工夫をした。③あいさつのできる児童が多いという本校のよさを継続していきけるよう、取組を続けていきたい。	B
健やかな体	①体育の授業や、運動委員会の児童の活動を通して、年間を通して、運動に親しむ環境を整える。②食育部を中心に、給食目標や給食週間を設定し、好き嫌いな食べることの習慣を身に付けたり、食の大切さを考えるための取り組みを実施する。	①運動委員会や環境保健委員会などの委員会を中心に、運動に親しむ取組を実施した。学校保健委員会で、健康な体づくりをテーマに、各クラスで運動目標を作成し、目標達成に向けて取り組んだ。②食育部を中心に、毎月給食目標を設定して取り組んだ。給食週間には、給食委員会が食事のマナーについて呼びかけた。	B
地域連携	①学校運営協議会を立ち上げ、地域・社会とつながる学校づくりを進める。②コロナ禍の制限がある中でも、地域の人と関わる機会や方法を工夫し、地域とともに歩む子どもを育てる。③生活科や総合的な学習の時間では子どもの実態や願いを明らかにしながら学習を展開している。また、地域の「材」について、子どもたちが主体的に関わり取り組んだりできるように教材研究を進める。	①学校運営協議会が立ち上がり、教職員が地域の人々と直接話をする機会ができた。②幼稚園や中学校との交流や、地域の様子を探る活動などを通して、地域とのつながりを意識した学習ができてきた。③子どもたちが進んで取り組める単元になるよう、構想を工夫した。来年度は、より主体的な姿を目指し、研究を続けていく。	A
いじめへの対応	①児童・家庭・地域の実態を把握し、児童が安心して力を発揮できる集団を育てることで、いじめの未然防止に努める。②いじめ防止対策委員会を中心とした全職員による情報共有と、早期対応、確実な事後指導を組織的に行う。③アンケートや教育相談を定期的に行い、児童が相談しやすい環境を整える。	①学年やブロックで児童の実態を共通理解し、適切な働きかけを行うことで、いじめの未然防止に取り組んだ。②いじめを積極的に認知し、早期対応を行うことができた。事後指導や再発防止の取組は十分ではなかった部分があるので次年度に生かしたい。③計画的なアンケートと教育相談により、いじめの早期発見ができた。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①教員がゆとりをもって取り組むことが子どもの活動の豊かさにつながることを考え、持続可能な働き方のできる職員室を目指していく。業務改善に取り組み、午後の時間を明日の準備に充てられるようにする。また、教科担任制やチーム学年経営により、効率的に授業準備に取り組めるようにする。②ブロック経営という視点で、若手教員に育成に学年内だけでなく学校全体で関わっていく。	①日課表の見直しや、年間授業時数の見直しに取り組む、職員の午後の時間の確保に取り組んだ。また、成績処理や、行事の運営など必要なものとしてでないものを精選し、持続可能な働き方の実現につながった。②ブロック研を週一回設定した。ブロック研の運営の仕方については来年度以降、検討する必要がある	B
コミュニケーション能力	①たてわり活動を通して他学年と関わる経験をする中で、コミュニケーション能力を育てる。②なかよしフェスティバル等、様々な場面で自分の考えや学習したことを伝える活動を通して、自分の考えを効果的に伝える方法を学ぶ。③子どもたちが自発的に発信したい、相手に伝えたいと思えるような学習内容や展開の工夫をする。	①学校スローガン「スマイル高舟台45周年」のイである「いろいろな学年となかよし」を達成しよう活動することができた。②重点研究のテーマ「発信力」を考えたことを通じて、職員がどのような機会にどんな手立てを打てば主体性が伸びののかを検証した。自分の考えを積極的に発信するにはまだまだ検討の余地がある。	B
考えて行動する力	①日々の授業で、見通しをもったり、自分の考えをもったりすることができるような指導・支援を継続する。②児童が必然性をもって考えたり発信したりする姿を目指した授業の工夫をする。	①掲示物の活用やロイロノートの活用など、自主的に学習を進めていく手段は様々だと子どもを児童に伝えながら指導を継続した。②児童が目的意識や相手意識をもって臨めるような場の設定をした。「なぜ」「どうして」といった問い返しも成果をあげる要因となっている。	B
児童生徒指導	①「こども手帳」の内容を中心に指導事項を共通理解し、一貫性と継続性のある生活指導を行うことで、児童が落ち着いて学校生活を送れるようにする。②YPなどを活用し、児童の自己肯定感を高めるとともに、児童が安心して力を発揮できる集団を育てる。③研修を通して、児童の課題に適切な指導・支援を行う力を高める。	①「こども手帳」に基づき、一貫性のある指導を行うことで、児童が安心して過ごせる環境を整えた。②YPアセスメントの結果をもとに支援検討会をもち、個や集団の課題に応じた支援を行った。③研修を通して対応力を高めることができたが、未然防止の観点からの取組が不十分であった。次年度の課題として取り組んでいく。	B
特別支援教育	①特別支援教育委員会を中心に、支援を要する児童の実態を丁寧に把握し、個に応じた支援の在り方考える。②特別支援教室を有効に活用し、集団不適応や登校しづりなど課題のある児童への支援と指導を継続的に行う。③支援を要する児童が、安心して学習に参加できるよう、授業や教室環境等の改善を行う。	①個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成と共有が進んだが、活用については改善の余地がある。②特別支援教室の機能を拡充し、児童のさまざまなニーズに応じた支援ができた。③個別最適な学びを実現するための環境改善や授業改善について研修をした。	A
ブロック内評価後の気づき	釜利谷中ブロックでは、集団の中でお互いの認め合い高めあおうとする子供を育てるための、人との関わり、つながり、コミュニケーション能力を大切にしながら、認め合い、高めあう力の育成を目指してきた。学力学習状況調査の結果から、意見をやりとりすることや、人とコミュニケーションをとるのが好きという児童が多い傾向が見られたことは、ブロックや各校で取り組んできた成果である。地域行事への参加意識も高いことから、学校や保護者だけでなく地域の方々も子供への関わりが多くあり、コミュニケーションを大切にしている子供達の育成につながっている。		
学校関係者評価	学校行事等への参加の機会が少なかったが、ICTを活用しながら学習する児童の姿や、一人一人に丁寧に対応する教師の姿を見ることができた。個別支援学級や特別支援教室など学習の場が工夫されていた。4月と比べると児童が大きく成長していることが分かる。コロナの影響がまだ残る中、学校は子どもたちに寄り添い、細かい支援をしていると感じる。職員の負担が大きいのではないかと、地域でできることを一緒に考えていきたい。		

中期取組目標振り返り	コロナ禍での持続可能な教育活動の構築を念頭に、職員の働き方を踏まえ、教育活動の価値を検証した1年であった。児童や職員の健康と安全を第一に、感染状況や衛生管理マニュアルに則って内容を精選し、安定した教育活動の持続を心がけた。特別支援教室を整備し、登校支援や学習支援、教育相談など、支援を必要とする児童が落ち着いて生活や学習する環境となっている。教育課程の中で「自発的・主体的に行動する力」の育成を目指し、教科を問わず発信力をテーマに研究を進めた。タブレット端末では各学年学級において積極的に活用され、実績も蓄積されている。学校運営協議会が発足し、教育活動における地域連携は、地域防災拠点訓練の児童の参加や近隣幼保小と連携した教育活動など、この1年で大きく進んだ。今後も児童の健康や安全と学校の教育活動の両立を継続していく。
------------	--

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①子どもが獲得した知識を活用できるよう、学習指導の内容や教材を学年内で共有する。また、中・高学年で教科担任制を実施し、低学年でも一部教科分担任制に取り組み効果的な指導を行う。②協力的な学習の場を積極的に取り入れ、子ども同士の関わりを増やすことで、自分の考えや友達への考えのよさに気づきながら思考力を伸ばす授業づくりをする。	①教科担任制の指導により、理科や社会など指導の一貫性が出ている。また、同教材を使用することで、知識や技能が皆同じ水準で習得できている。②コロナ禍が終わりに、協働学習の場面を意図的に増やした授業をしてきた。自然なかかわりの中で、コミュニケーションの場面も増え、お互いのよさに気づくことができた。そして自分の考えをいかに相手に伝えるかを意識できるようになってきている。	B
豊かな心	①YPアセスメントと横浜プログラムを活用し、一人ひとりの子どもに寄り添った指導・支援を継続し、互いに認め合える温かい学級風土づくりを進める。②道徳の授業において、子どもが主体的に考え、道徳的価値をとらえることができる授業を目指す。③自らあいさつできる子どもの姿を目指し、地域と協働してあいさつ運動の取組を継続する。	①YPアセスメントを年2回実施したり横浜プログラムを活用したりして、互いに認め合える学級風土を目指した。②道徳の授業でもとらえた道徳的価値やまごめ言葉や教室内に掲示し、意識付けを促した。十分とは言いえない。人権週間に行った命の大切さを考える取組は、児童の心に残る話を聞くことができた。③あいさつ週間には進んであいさつをする児童が増えた。	B
健やかな体	①体育の授業や運動委員会の児童の活動を通して、年間を通して様々な運動に親しむ環境を整える。②食育部を中心に、給食目標や給食週間を設定し、好き嫌いな食べることの習慣を身に付けたり、食の大切さを考えるための取組を実施する。	①運動委員会や環境保健委員会などの委員会を中心に、運動に親しむ取組を実施した。学校保健委員会で、健康な体づくりをテーマに、各クラスで運動目標を作成し、目標達成に向けて取り組んだ。②食育部を主として取り組んだ。給食週間には、給食委員会が食事のマナーについて呼びかけたことで、より良い給食の返却の仕方を意識することができた。	B
地域連携	①学校運営協議会と連携し、地域・社会とつながる学校づくりを進める。②コロナ後も感染症対策を十分にとつたうえで、地域の人と関わる機会や方法を工夫し、地域とともに歩む子どもを育てる。③生活科や総合的な学習の時間では子どもの実態や願いを明らかにしながら学習を展開している。また、地域の「材」について、子どもたちが主体的に関わり取り組んだりできるように教材研究を進める。	①学校運営協議会で学校のこと、地域のことなどの情報を共有したり、ご意見をいただくことができた。今後の学校運営に生かすことができた。②数年間続いていたコロナの影響で実施することができなくなった地域の方との交流の機会が少しづつ戻ってきた。今年度は「スマイル高舟台大作戦」を実施し地域の方と児童が一緒に活動する機会となった。実施の方法については今後、検討が必要である。	A
いじめへの対応	①児童・家庭・地域の実態を把握し、児童が安心して力を発揮できる集団を育てることで、いじめの未然防止に努める。②いじめ防止対策委員会を中心とした全職員による情報共有と、早期対応、確実な事後指導を組織的に行う。③アンケートや教育相談を定期的に行い、児童が相談しやすい環境を整える。	①子供たちが安心して相談したり、話したりできる関係づくりを目指した。子どもたちの困り感やSOSに対して、アンテナを高く日頃の様子を見守ることで未然防止に努めた。②いじめに対しては積極的に認知し、組織として対応した。いじめ研修を年4回実施し、聞き取りの方法や、対応について職員で共通理解した。③教育相談を定期的に行い、子どもたちの困り感を早期に発見することができた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①教員がゆとりをもって取り組むことが子どもの活動の豊かさにつながることを考え、持続可能な働き方のできる職員室を目指していく。業務改善に取り組み、午後の時間を明日の準備に充てられるようにする。また、教科担任制やチーム学年経営により、効率的に授業準備に取り組めるようにする。②ブロック経営という視点で、若手教員の育成に学年内だけでなく学校全体で関わっていく。	①職員への意識調査からも、放課後のゆとりをもって取り組めることが分かった。会議時間の使い方も、持続可能な働き方のできる職員室が定着してきた。また、教科担任制により効率的に授業準備に取り組め、ゆとりにつながっている。②ブロック経営という視点により、若手教員の育成に学年内だけでなく学校全体で関わっていく。	B
コミュニケーション能力	①たてわり活動を通して他学年と関わる経験をする中で、コミュニケーション能力を育てる。②なかよしフェスティバル等、様々な場面で自分の考えや学習したことを伝える活動を通して、自分の考えを効果的に伝える方法を学ぶ。③子どもたちが自発的に発信したい、相手に伝えたいと思えるように、教師自身が教材開発の面白さを感じながら学習内容や展開の工夫が必要である。	①たてわり活動を通して他学年と関わる経験することで、相手思いや態度やコミュニケーション能力を育ててきた。②なかよしフェスティバルなど、様々な場面で自分の考えや学習したことを伝える活動を通して、自分の考えを効果的に伝える方法を学ぶ。③子どもたちは主体的に発信する意識がまだ低い。子どもたちが自発的に発信したい、相手に伝えたいと思えるように、教師自身が教材開発の面白さを感じながら学習内容や展開の工夫が必要である。	B
考えて行動する力	①日々の授業で、見通しをもったり、自分の考えをもったりすることができるような指導・支援を継続する。②児童が必然性をもって考えたり発信したりする姿を目指した授業の工夫をする。	①②今年度の重点研究では「自発的・主体的に行動できる子どもの育成」をテーマにしたい。やり取り、やってみよう！が高まる授業を研究してきた。材を研究し授業展開を工夫することで、主体的に関わる姿を授業の場面多く見ることができた。今後も児童の自己肯定感と主体性を高めるために、主体的に行動する場面を多く設定するとともに、個々の児童への適切な支援を行う必要がある。	B
児童生徒指導	①「こども手帳」の内容を中心に指導事項を共通理解し、一貫性と継続性のある生活指導を行うことで、児童が落ち着いて学校生活を送れるようにする。②YPなどを活用し、児童の自己肯定感を高めるとともに、児童が安心して力を発揮できる集団を育てる。③研修を通して、組織的に児童の課題に適切な指導・支援を行う力を高める。	①「こども手帳」の内容についても職員で検討を重ね、共通理解のもと全校で取り組むことで、子どもたちが落ち着いて過ごせることにつながった。ルールがあまりないものもある。職員、児童、家庭の共通理解のもとで取り組んでいきたい。②YPをもとに、ブロック・学年で支援検討をした。多くの職員に関わることで支援の幅が広がった。③定期的に職員研修を実施し、対応力を高めることができた。	B
特別支援教育	①特別支援教育委員会を中心に、支援を要する児童の実態を丁寧に把握し、個に応じた支援の在り方考える。②特別支援教室を有効に活用し、集団不適応や登校しづりなど課題のある児童への支援と指導を継続的に行う。③支援を要する児童が、安心して学習に参加できるよう、授業や教室環境等の改善を行う。	①個別支援計画、個別の指導計画の作成の仕方について共有し、一人ひとりに応じた支援を考えたことができた。支援の振り返りや評価について今後見直ししていく。②特別支援教室に関する職員を増やしたことで、支援の幅が広がった。集団不適応登校やしづりなどの課題のある児童へ、チームとして支援することができた。③横浜型センター機能を活用し、コンサルテーションや、特別支援研修を実施した。教室の中でできる特別支援について学び、教室の中で実践した。	A
ブロック内評価後の気づき	人との関わり、つながり、コミュニケーション能力というキーワードのもと、ブロックとしての育成取り組みを進めている。学力・学習状況調査からも「コミュニケーションをとること」「相手の立場になって考えること」「気持ちや表情の変化に気付くこと」に関する項目で市の平均を上回っている。また、小学校高学年から中学校にかけて上がっていることから、行事などがコロナ禍前の状況に戻りつつあることで、その結果あいさつなども徐々に戻ってきていると考えられる。今後も学校や保護者だけでなく、地域も含めて子どもとの関わりを深めていくことが大事であり、清掃活動などでも地域とともに歩めるように努めていきたいと考える。		
学校関係者評価	授業や学校行事の参観、学校運営協議会やまごめとともに歩む学校づくり懇話会の開催を通じて、子どもたちの学習や活動の様子をじかに見ていただく機会を設けた。児童の実態や学力、友達関係、地域での様子などについて情報を共有し、登下校の見守りや特別支援教育支援員の募集協力につながっていくことができた。学校から重点研究の取組やコロナ禍を踏まえた持続可能な日課表や学習支援、教育相談など、支援を必要とする児童が落ち着いて生活や学習する環境を整備した。教育課程の中で「自発的・主体的に行動する力」の育成を目指し、わくわくして学習に取り組む姿を引き出すことができて研究を進めた。学校運営協議会が発足して2年目を迎え、地域防災拠点訓練の児童参加や地域と一体となった環境整備など、地域連携が進んでいる。次年度は教育DXや幼保小連携、学力向上、情報発信を心がけ、児童が安心して過ごせる居場所づくりをさらに進めるとともに、児童の中に学びの足跡が着実に残ることを目指して教育活動を推進していく。		

中期取組目標振り返り	コロナ後の学校の日常を取り戻す過程で、不易と流行を念頭に、職員の働き方を踏まえて、教育活動の価値を検証した1年であった。日課表を見直し放課後時間を確保し、安定した教育活動の持続を心がけた。中・高学年での学年教科担任制や算数少人数指導による授業改善に取り組んだ。特別支援教室の安定稼働を回り、登校支援や学習支援、教育相談など、支援を必要とする児童が落ち着いて生活や学習ができる環境を整備した。教育課程の中で「自発的・主体的に行動する力」の育成を目指し、わくわくして学習に取り組む姿を引き出すことができて研究を進めた。学校運営協議会が発足して2年目を迎え、地域防災拠点訓練の児童参加や地域と一体となった環境整備など、地域連携が進んでいる。次年度は教育DXや幼保小連携、学力向上、情報発信を心がけ、児童が安心して過ごせる居場所づくりをさらに進めるとともに、児童の中に学びの足跡が着実に残ることを目指して教育活動を推進していく。
------------	--

重点取組分野	令和 6 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①子どもが獲得した知識を活用できるよう、知識の定着を目指す授業展開を行う。同時に、獲得した知識や技能を次の活動につなげていく年間計画を立てる。②昨年度の重点研究で「自発的・主体的に行動できる子どもの育成」を掲げて取り組んだ。子どもたちの得た経験をさらに生かすために、子どもたちの興味・関心を高め、授業に意欲的に取り組めるようにする。		
豊かな心	①互いに認め合える温かい学級風土づくりを目指し、YPアセスメントや横浜プログラムの活用を図る。②命の大切さにふれる学習を充実させることで、自分や周りの人を大切にしようとする気持ちを育む。③進んであいさつをすることが日常的にできるよう取組を工夫する。		
健やかな体	①体育の授業や運動委員会の児童の活動を通して、年間を通して様々な運動に親しむ環境を整え、体力向上を図る。②食育部を中心に、給食目標や給食週間を設定し、好き嫌いな食べることの習慣を身に付けたり、食の大切さを考えるための取組を実施する。		
地域連携	①学校運営協議会と連携し、地域・社会とつながる学校づくりを進める。②地域の方と関わる機会や方法を工夫していく。地域の方と子どもたちとの交流の機会となるよう「スマイル高舟台」を推進する。③生活科や総合的な学習の時間では子どもの実態や願いを明らかにしながら学習を展開していく。また、地域の「材」について、子どもたちが主体的に関わり取り組んだりできるように教材研究を進める。		
いじめへの対応	①児童・家庭・地域の実態を把握し、児童が安心して力を発揮できる集団を育てることで、いじめの未然防止に努める。②いじめ防止対策委員会を中心とした全職員による情報共有と、早期対応、確実な事後指導を組織的に行う。③アンケートや教育相談を定期的に行い、児童が相談しやすい環境を整える。		
人材育成・組織運営(働き方)	①年間授業時数の見直しに伴い、週時数も減らしていく。職員の午後の時間の確保により、より一層の授業準備時間が取れるようにする。学年やブロックでの教材研究を計画的に進めるようにする。②校務分掌において、所属していない部署の仕事を可視化することで、少しでも多くの仕事をこなせるようにする。また、経験年数の少ない職員を巻き込んで仕事をやる意識をもてるようにする。		
コミュニケーション能力	①たてわり活動を通して他学年と関わる経験をする中で、コミュニケーション能力を育てる。②なかよしフェスティバルなど、様々な場面で自分の考えや学習したことを伝える活動を通して、自分の考えを効果的に伝える方法を学ぶ。③子どもたちが自発的に発信したい、相手に伝えたいと思えるように、教師自身が教材開発、展開の工夫、支援の仕方などの授業改善に取り組む。		
考えて行動する力	①日々の授業で、見通しをもったり、自分の考えをもったりすることができるような指導・支援を継続する。②児童が必然性をもって考えたり発信したりする姿を目指した授業の工夫をする。③児童が安心して自分の考えや意見を発表したり、行動したりできる環境を工夫する。		
児童生徒指導	①「こども手帳」の内容を中心に指導事項を共通理解し、一貫性と継続性のある生活指導を行うことで、児童が落ち着いて学校生活を送れるようにする。②YPなどを活用し、児童の自己肯定感を高めるとともに、児童が安心して力を発揮できる集団を育てる。③研修を通して、組織的に児童の課題に適切な指導・支援を行う力を高める。		
特別支援教育	①特別支援教育委員会を中心に、支援を要する児童の実態を丁寧に把握し、個に応じた支援の在り方考える。②特別支援教室を有効に活用し、集団不適応や登校しづりなど課題のある児童への支援と指導を継続的に行う。③支援を要する児童が、安心して学習に参加できるよう、授業や教室環境等の改善を行う。		
ブロック内評価後の気づき			
学校関係者評価			

中期取組目標振り返り	
------------	--